



昔を思い出しながら語り合いました

**地域** 西大崎くらしの学校  
地域の伝統を後世に伝えよう(岩出山)

7月9日、岩出山地域の川北第2集会所で、西大崎地区の歳時記や暮らしに伝わる行事を思い出しながらまとめてみようという「西大崎くらしの学校」が行われ、西大崎地区の高齢者14人が集まりました。参加者は、「昔はこの家でも納豆を作って食べていたんだよ」「七夕のときには麦わらで作った馬を竹飾りにつないで、翌日願いが届くように屋根の上に置いたんだよ」など、子どものころの思い出や出来事を懐かしそうに語り合いました。自分たちの地域に昔から伝わるすばらしい風習は、大切にしていきたいですね。



クッキー作りを体験し、それを入れる箱も自分たちで作りました

**国境** 三本木地域と米国ダブリン市の国際交流  
国境を越えて友情を深めよう(三本木)

三本木地域と米国ジョージア州ダブリン市の国際交流で、ダブリンの14～16歳の学生6人を含む男女8人が大崎市を訪れました。7月10日から14日まで、同地域でホームステイをしながら市内の観光施設や名所を訪ねたり、日本文化に触れるなどさまざまな体験をしました。三本木地域とダブリン市は、YKKの工場があることが縁で交流が始まり、学生の派遣と受け入れを交互に続けて今年で9回目を迎えます。言葉や文化の壁を越え、互いにいろいろなことを学んだ5日間になりました。

7月13日、大崎市食生活改善推進員連絡協議会鹿島台会(渡辺安子会長)の移動研修会が行われ、登米市の平筒沼を一周するウォーキングで汗を流しました。旧鹿島台町では脳卒中の死亡率が非常に高かったため、食生活改善推進員の皆さんで、減塩推進に取り組んできました。塩分を抑えた食事の試食会や研修会を開くなどの地道な活動が認められ、平成18年には東北農政局長食育奨励賞を受賞しました。食も運動もとても大切。ウォーキングで健康を保ち楽しく長く活動を続けたいと、皆さん元気いっぱいです。

**ウ** 市民の健康のため、まずは自ら健康に  
ウォーキングで気分爽快(鹿島台)



適度な運動が健康の秘訣

7月11日、松山青少年交流館を会場に、大成館大学学習計画の一つとして「太極拳をやろう」が開催され、47人が参加しました。大成館大学は、松山地域の人が生涯にわたって、健康で元気な生活を送るために公民館が主催する事業です。2回目となる今回は、大崎市古川太極拳協会の山岸克正さんを講師に迎えて太極拳を行い、ゆっくりと体を動かしながら、太極拳独特の動きを練習しました。参加した皆さんは慣れない動きに戸惑いながらも、気持ちよい汗をかいて楽しんでいました。

**体** 大成館大学「太極拳をやろう」  
体を動かすのは気持ちいい!(松山)



基本となる足の動きを中心に汗を流しました



みんなで楽しく夕食づくり

**み** 合宿生活で深めるきずな  
みんな、たくましくなったね(田尻)

7月3日から7日までの5日間、田尻地域の公園の中の宿口マン館でロマンスクールが行われ、田尻地域の小学4～6年生58人が参加しました。ロマンスクールとは、学校に通いながら集団生活をするることにより、集団で行動することの難しさや、仲間と協力することの大切さを学ぶための宿泊学習です。期間中、子どもたちは部屋の整理・清掃、朝食・夕食の準備までをすべて自分たちで行います。いつもはお父さんやお母さんに頼っている子どもたちも、この体験を通して大人に一步近づいたことでしょう。



にじの・・・子どもまつり  
楽しいステージに子どもたちも大興奮!

**親** 家庭教育学級「にじの・・・子どもまつり」  
親子で一緒に楽しもう(古川)

7月6日、西古川地区公民館で「にじの・・・子どもまつり」が行われました。これは、仙台のミュージカル集団「あむらいす」が演じるミュージカルに、にじの幼稚園の園児と保護者が一緒に参加することができるイベントです。いろいろなゲームをしながら進んでいくミュージカルに、子どもたちは最初から最後まで笑顔いっぱい楽しんでいました。保護者のかたは、恥ずかしさからかミュージカルにはあまり参加できなかったようですが、子どもたちの元気な姿を温かく見守っていました。



運搬車で運ばれた土石の山。びっくりする量です



皆さん汗だくになって協力してくれました

**美** オニコウベスキー場復旧ボランティア  
美しいグレンデが復活(鳴子温泉)

6月6日、オニコウベスキー場周辺を襲った局地的な豪雨で、大量の土石がグレンデの中に流れ込みました。復旧工事に重機を使えば芝や花畑が消えてしまい、回復に相当の期間がかかるため、手作業で岩を除去するしか方法がありません。「力を貸してください」スキー場では、各メディアを通してボランティア作業の参加を呼びかけたところ、7月1日の作業当日には約400人が市内だけでなく県内外から駆けつけてくれました。

次から次へと集められた岩や土石は運搬車で下まで運び出されましたが、上に行くほど斜面がきつくなり、ついにはキャタピラの運搬車でも登れなくなりました。「すみません。ここまで手で運んでください」運搬車の作業員から悲壮な声が上がります。それでもひるまずボランティアの人たちの列が何本も出来ました。「無理しないでね」「休み休みやるべ」と声を掛け合い、手渡しリレー方式で大量の土石を運び出すことに成功しました。オニコウベスキー場を愛している人、支えてくれる人がこんなにも多いことをあらためて感じた1日でした。皆さんありがとうございました。